



中村俊定文庫
文庫 18
840



多根体



莫逆の二風子東方を訪ふ誘ひに
余も固本の梅をこぼし小舟に載りて
浦を走せしむるに三つを以て
頼みあり追ふる節も体も成りて
亦路の遠ひを有るを以て言
語を絶て止むる又三つを以て
彼人より於のついでに

三巻をばといふふらもはるにすつ調由西
董つと人を識るひ月の光雪をかくやく
先には本の権ひをわくくくくく子羅浮
山下酒肆ふふを銭書きうくく妙子
あやうくくくは清純くくく銭身余
西くくく師雄みあくくくく仙あは
くくく大子笑く酔中に序きくく京人

天保四己卯月



蒼虬

お梅や任阿まふれと掛造り
于勢々きくくあふ春能大根 眉岳
出代乃隣り一船牛追て 寸外
日く勢の風能早うかく梅を 蒼虬
梅植乃梅苗写ひく月の光 眉岳
築く及堀を熱える初返 寸外

奇合ル歌乃そあつてうを宴々
志赤子あま——傘をこの次
儉約のよう水届くハ幡領
至宗以敷乃立枝をさる
風のあはれ水浮葉のふいと
拜と合をにたあて 了以
こゝろをさる月をさるよある小料理や
囃し娘乃踊んやある
眉岳

蜻蛉を舞あつにほかろく
好、採つてとる法 和鑽
嘆息乃下にをさる風呂をえそ
あまの者く由良馬刀籠
神、役らとあなの家を春宴さ
揚枝を割る音のこらし
ま乃しあまの姉のほし藤入
まのむ相撲よ雪花さする
眉岳
寸外
蒼虬
寸外
蒼虬
寸外
蒼虬
寸外
蒼虬

建坊ぬく積里に駕籠引合て 眉岳

付本むと休ま 嘯ふ散薬 寸外

追従にきつゝの者を休免也 蒼虬

二階乃口、見落る 行燈 眉岳

細帯で源て基る 糸あけ 寸外

傍て息とる 身おと 蒼虬

くまこくと深柿のきる 藪垣 眉岳

野分 濟ても細くぬ 月 寸外

初乃あひ鯉四五升先漬て 蒼虬

竈土被を相まゆも 湯ぬ 眉岳

ゆらしてあまの 沙走の放色馬 寸外

湯通里あに曳のき 竿外 眉岳

糸の海布に揚場くも取て 蒼虬

下能何ける 肉乃麻荷き 寸外

皆の皆も波も形なりて桃乃也 眉岳

雲の雲 雲雀の啼 法ある空 寸外

あらしに春の小橋乃すあらし 蒼虬

待て 夏 扇は出来を陰 眉岳

汗偶、銜とよとる 雪の月 寸外

置洗濯もとれ 暮ぬ年 蒼虬

秋風よをれを脚をるる 眉岳

長柄乃 家も 暮るる 寸外

近以 汝 出入も 暮るる 蒼虬

歌 ぼるる 暮るる 眉岳

山 蟻も 暮るる 寸外

花も 暮るる 蒼虬

塩辛も 暮るる 眉岳

さし 雷も 暮るる 寸外

物色してハッまで隠る紀三井寺 蒼乳

灰まみり色ある油虫 這ふ 眉岳

よりほろろ小春に月もほろの里と 寸外

町てを仕探 知ぬ 様 蒼乳

神子止る履道末の年の輪と 眉岳

世尊と蓮米縁を纏ゆけ置 寸外

初日て佛乃解を皆解し 蒼乳

作もつて花色を垂る挿蓮花 眉岳

切里ゆき様にもある油糸 寸外

出村を寸山よりふるふ家根 蒼乳

大丸乃あけをハ鯉の拂座り 眉岳

鰯 壺をさし山よりさす 寸外

青山の根舟を今に教ぬは 蒼乳

折もつて床几乃また壺をぬ月 眉岳

壺をぬは小家のりしものたて 寸外

次舟小砂負の釣減らさる 蒼乳

日暮まゝ城乃繩多持通らるる 眉岳

約束かけを 妙は炮録 寸外

ざらしや戸麻よさたる 砲者の夜五 蒼虬

緋投して 人はおり 眉岳

とんみまも時刻は 霧の中 寸外

ちまひしや 葉は鳥乃 蒼虬

寸外

仮葺の家根の 藤まる 柳

経籠の雨を 懸る 雁 蒼虬

蛤の苞お 上ら 水掛 眉岳

又煙お 乃昔の 声も 滅る 寸外

空を 穿て 高し 月影 蒼虬

林鹿 乃野 鹿 早 眉岳

くちくちと夜長を家の報謝宿 寸外
嫁の不足も色法を出ぬ 蒼乳
年と胸をなぐ猫を呼ぶ所行 眉岳
庭火色うら吹降ふある 寸外
山越ゆる加さの市に荷を降し 蒼乳
茶乃入色標をやるまじり 眉岳
志のうらまを有明 孫の土用を 寸外
泣進ふて来て 暮の蚊うら 蒼乳

切まてり叩て 暮ふ番火の 眉岳
腹乃痛ふあなを 纏炭 寸外
氣の財系をたの指し買 蒼乳
徒り入きそ 出らる 女祿 眉岳
空う登のうしはく春の兵隊船 寸外
居眠る 顔のちやんと持合ふ 蒼乳
置て来るこゝろをの上乃届状 眉岳
不世のまきて 流る 手拭 寸外

惟子に宿の遊女も已あつて

蒼乳

心廉こししうら叫つて水

眉岳

喰くもせぬ出立の飯乃焦交里

寸外

此一下雨も水けるあんと山

蒼乳

軽庵に忌屋のころも古鹽

眉岳

何交乃お屋も知もぬ新編

寸外

出来合の蕎麦が隙入るの月

蒼乳

通る河もいふに碓氷ノある

眉岳

歩遠ふ碓氷も川も掘るく 寸外

船も乗てももまも小言もく 蒼乳

花盛る鑄かちの鐘の音も低き 眉岳

田畑裏寒きももも海もく 寸外

宵朝もぬももも春乃も味もく 蒼乳

筧乃も漏るもももも裏もく 眉岳

巻ひたるぬまの夜燭燭乃
儉約あるる人小折あひて

一肖

引たるき障子乃換や新を

見おろ寸梅の透通る川

焼ぬうち山新田を切込て

たんたまの火を赤燭よ加次

火の通乃月を結句よ志ふ進出

坊主の光る冷法を

買ひんた柿を虫か腐らせる

隣乃葬て鶏のりぬ

あふれて居る律家系夫婦位

追従ひ乃牙人等ら

蒸らるる矢橋の舟に森をむひ

雲の峯一うらと出る月

洗ひぬきけ乃垣を引掛て

肉よあるよ守り守り安ん

眉岳

寸外

一肖

眉岳

寸外

一肖

眉岳

寸外

一肖

眉岳

寸外

一肖

眉岳

先々く貸多うと鬚剃紙 寸外

後ふかたぬ筆たをひ置 一肖

このそらうと氣の盛ハ知ぬ谷 眉岳

灰汁糟の寄る席杖の中 寸外

馬醫者を一りてあしの田螺の 一肖

遠魚舟ぬのの船小舟ま 眉岳

歩成らとまつるかなりにて床に 寸外

はふらとまつる杖をむあり 一肖

定免乃年々に減る日鏡富 眉岳

ほつと雪のふる樹乃枝 寸外

細やの糸襦を鏡又突つけ 一肖

尋はよき事をも云う阿となき 眉岳

追鏡の屋敷乃大を扇遊 寸外

法心吸口のゆるむ戸張 一肖

益人あそび陸多ま月の秋 眉岳

忘きてあつた焼栗の飛ふ 寸外

寶升 抱 瘡 見 露 不 留 更 有 一 肖

よき 一 由 修 仁 度 下 駐 眉 岳

志 志 一 家 受 志 一 作 國 馴 深 寸 外

新 報 一 事 一 人 一 出 行 一 物 志 一 肖

一 人 一 出 行 一 物 志 一 肖 眉 岳

湯 登 乃 法 一 登 乃 離 進 寸 外

一 人 一 出 行 一 物 志 一 肖 眉 岳

一 人 一 出 行 一 物 志 一 肖 眉 岳

一 人 一 出 行 一 物 志 一 肖 眉 岳

一 人 一 出 行 一 物 志 一 肖 眉 岳

一 人 一 出 行 一 物 志 一 肖 眉 岳

一 人 一 出 行 一 物 志 一 肖 眉 岳

一 人 一 出 行 一 物 志 一 肖 眉 岳

一 人 一 出 行 一 物 志 一 肖 眉 岳

47

7

Handwritten scribbles

Handwritten scribbles

Handwritten scribbles

Handwritten scribbles

Handwritten scribbles

Handwritten scribbles

Handwritten scribbles

Handwritten scribbles

Handwritten text in a cursive script, possibly a mix of English and another language, written on the right page of the manuscript.

Handwritten scribbles

Handwritten scribbles

